

# 「文字の檻」を超える身体

—— 記号論による四次元言語「手話」の翻訳可能性 ——

文学部文学科文芸メディア専攻

ひろさわ しょうた  
廣澤 翔太

## 第1章 はじめに——「翻訳された世界」を生きるとは

現代の社会環境は、音声言語とそこから派生した書記言語（文字）によって、堅牢に設計されている。本専攻（文芸メディア専攻）において「文字」を根源的なメディアとして捉える視座は、人間が他者と交通する「間」を繋ぐ技術が、我々の思考そのものを規定していることを声高に訴える。しかし、この文字中心の秩序は、特定の人々にとっては透明な「檻」として機能する。その人々とは、日本手話（*Japanese Sign Language: JSL*）を第一言語とする「ろう者」たちである。彼らにとっての手話は、単なる「音声言語の代用」や「ジェスチャー」ではない。オリバー・サックス（1996）はストーキーを引用し、こう指摘する。「四次元の広がりがあるのは、唯一、手指言語だけである<sup>1</sup>」と。

しかしながら、聴者中心のマジョリティ社会は、手話の躍動を静止した書記言語の「ラベル（辞名）<sup>2</sup>」によって固定し、日本語の枠組みへと回収し続けている。筆談や字幕、あるいは「日本語対应手話<sup>3</sup>」といった多数派社会からの配慮のしくみは、一見するとバリアフリーな架け橋に見える。だが、その実態は、ろう者が自らの身体的リアリティを削ぎ落とし、マジョリティの記号体系へと無理やりに合わせる「翻訳された世界」を生きることを強いているのではないか。本論文では、この非対称な翻訳プロセスに潜む「言語的暴力性」と、そこからこぼれ落ちる「身体の声」を、記号論という名のメスを用いて解剖していく。

さて、手話から書記言語への移行が孕む暴力を論じる上で、ヤーコブソン（*Roman Jakobson*）の翻訳理論は、まずもって重要な補助線となる。ヤーコブソン（1959）は、翻訳を以下の三つに分類した<sup>4</sup>。

1. 言語内翻訳（言い換え）
2. 言語間翻訳（狭義の翻訳）
3. 記号法間翻訳（言語記号体系以外の記号体系と言語記号間での翻訳）

ヤーコブソンの定義に従えば、JSL（身体・視覚記号）から書記日本語（文字記号）への移行は、単なる言語間の置き換えではなく、非言語的な記号体系を言語記号へと移し変える「記号法間翻訳」の側面を強く持つことになる。本論文が問うのは、この「記号法間翻訳」のプロセスにおいて、手話特有の身体性がどのように剥ぎ取られ、聴者の論理へと「同化<sup>5</sup>」されているのか、という点である。

具体的には以下の三点を検証する。第一に、聴者向けに設計されたメディア環境において、ろう者が直面する「翻訳の断絶」とは何か。第二に、この断絶を埋めるための「ラベル化」や「筆談」は、本当に共通言語たり得ているのか。第三に、文字という二次元の檻の中で、身体はいかにしてその固有の「熱」を奪還しうるのか、という問いである。それでは、手話と書記言語の間にある「断絶」の正体とは何か。それは両者のメディアとしての次元の決定的な食い違いにある。

上述したように、手話と書記言語は、まったくもって次元の異なる言語メディアである。音声言語や文字が、一発話につき一つの情報を順次繋いでいく「線状」のメディアであるのに対し、手話は空間というキャンバスの上に複数の情報を「同時」に提示するのだ。また、

手話言語学の研究者である神田和幸は、手話は「構成素そのもの<sup>6</sup>」の構造が曖昧であり、音声言語のように意味以前の最小単位への分解（二重分節<sup>7</sup>）が困難な構造を持つと指摘している（神田 2022:6-7）。つまり、手話はその発話の瞬間に、空間的な配置、動きの速度、表情の強度が渾然一体となって意味を成す「四次元の塊」なのだ。この「四次元性」と「同時性」こそが、手話の独自性の核である。すなわちそれは同時に、手話を「二次元の文字」へと翻訳しようとする行為自体が、常になにかしらの情報の欠落を招く、ということの意味する。本論文では、この不可避な欠落（ズレ）を起点として、文字と言語、そして身体の関係性を再考していく。

## 第2章 言語の抑圧——ろう者の世界とその歴史

手話の抑圧と、ろう者が被ってきた「翻訳」の不条理を論じる上で、1880年のミラノ国際会議は避けて通ることのできない歴史的転換点である。オリバー・サックスの記述によれば、この会議は「ろう教育」の名を冠しながらも、その実は聴者主導による一方的な弾圧の場であった。会議では、ろうの教員たちが票決から事実上締め出された状態で、手話の使用を公式に禁じ、「口話法<sup>8</sup>」を全面的に導入することが採択された。この決定がもたらした結果について、サックスは「ろう者の世界と言語を徹底的に破壊すること」（サックス 1996:52）であったと断じている。三ッ木によれば、かつてシュライアーマハーは「人はみな、おのれが語る言語の暴力の中にいる」（三ッ木 2008:32）と述べたが、ミラノ会議以降の教育現場は、まさにこの「言語の暴力」が制度化された空間へと変貌した。ろう児たちは、自らの身体から溢れ出る自然な表現（手話）を封じられ、聴者の論理である音声言語の模倣を強制されるという「幽閉」の状態に置かれたのである。この歴史的事実は、単なる過去の過ちではない。手話を「不完全な記号」や「音声言語の補助手段」と見なし、書記言語というマジョリティの檻への翻訳を強いる現代の社会構造は、このミラノ会議の決定から地続きにある「原罪」そのものであると言わざるを得ない。

一方、こうした抑圧の歴史とは対照的に、メディア環境の設計次第で「障害」そのものが消滅しうることを証明した事例が存在する。サックスが紹介する「マーサズ・ヴィンヤード島」の事例である。

マーサズ・ヴィンヤード島では、一六九〇年代に最初のろう者が入植して以来、二百五十年間にわたってある種の遺伝性聴覚障害があらわれつづけた（中略）マーサズ・ヴィンヤード島では、島民のすべてが手話を覚えるという形でこの状況に適応した。

（サックス 1996:57-58）

この事例は、本研究におけるメディア論的な視座に強力な根拠を与える。つまり、コミュニケーション・メディアが完全に共有されている環境下において、聴力の有無という肉体的な差異は、社会的欠陥（障害）としては顕在化しないのである。マーサズ・ヴィンヤード島の教訓は、人間が孤立した個体ではなく、メディアを介した「間」の存在であることを鮮や

かに証明する。すなわち、我々が認識している「障害」とは、個人の肉体的な不全に起因するものではない。それは、マジョリティに合わせて設計された偏狭なメディア環境が、そこに適応できない身体を排除する際に生成する「社会的な境界線」に他ならないのだ。

さて、ここまで見てきたような「メディア環境による境界線」の事例は、聴者自身がマイノリティとなる状況において、より鮮明に可視化される。それを証明するように、文化人類学者の亀井伸孝は、手話が公用語となっている場（ろう者の集会、パーティのようなもの）に聴者が足を踏み入れた際の「逆転体験」について報告している。普段は「配慮する側」である聴者が、手話という空間においては「言葉が分からない少数派」へと転落し、通訳を必要とする存在となる。このとき、司会者のろう者から「配慮が足りず、すみませんでした」と謝罪された亀井は、そこに強烈な疎外感と、普段ろう者が味わっている非対称性を痛感したという（亀井 2009:17）。この「逆転」が示唆するのは、言語能力の優劣ではなく、単に「その場の多数派が使用するメディア権力」の問題である。現在の社会システムは、ろう者に対してのみ「日本語（音声・書記）」への翻訳努力を求めている。しかし、マーサズ・ヴィンヤード島の例や、ろう通訳者による、アメリカ手話（ASL）から日本手話（JSL）への「リレー通訳」（亀井 2009:12）が音声言語を一切介さずに行われる事実は、手話が独自の文化的独立性を持つことを示している。

翻訳とは、常にマジョリティの言語へ回収されるためのプロセスであってはならない。亀井が体験した疎外感とは、我々聴者が無自覚に行使している「翻訳の強制」という暴力性を、鏡のように映し出している。それではなぜ、これほどまでにろう者は抑圧され、聴者との間に溝が生まれてしまうのだろうか？

ここで一つの仮説が立つ。それは単なる差別の歴史の問題だけではなく、「手話」という言語が持つ独特な記号構造（メカニズム）に、聴者があまりにも適応し難く、言語上の距離があるからではないか？ 感情論ではなく、論理的にこの溝を解明するために、次章では手話を「記号」として解読することを試みる。

### 第3章 日本手話の記号論的分析——動く身体記号

#### 3.1 記号過程（セミオシス）としての手話

本章ではアメリカの哲学者、チャールズ・サンダース・パース（*Charles Sanders Peirce*）の記号学理論をもとに、手話を記号としてとらえることを試みる。特に、パースの提唱した三分法のうち、「対象との関係における記号（第二次性）」——つまり、アイコン（*icon*）、インデックス（*index*）、シンボル（*symbol*）——の分類を中心に、手話の記号的特徴を整理することで、手話と書記言語にどのような特性があり、その間にいかなる言語的隔たりや翻訳困難性があるのかを示す。

まずは、日本におけるパース研究の第一人者、米盛裕二による、パース記号学の重要概念である「記号過程（セミオシス / *Semiosis*）」の解釈をまとめておこう。

それは「記号」「対象」「解釈項」の三項関係によって成立し、その記号とは、何かに

対して何か他のものを「表意する」ものである。(米盛 1981:27, 109-110)

この定義を換言すれば、記号が対象を指し示し、解釈者の精神になにかしらの解釈項を生じさせる一連の作用のこと、これが「セミオシス」ということになる。つまり、手話における手の動きは、単なる物理運動ではなく、受け手の精神の中に「同等の記号」を想起させ、常に「何かがある何かを表す」という動的なプロセスとして理解可能だろう。

では、この目まぐるしく動く身体記号を、我々はどう捉えればよいのか？ そのための有効な補助線となるのが、パースによる「アイコン・インデックス・シンボル」という三つの分類である。手話の記号的特性を解剖する上で、このパースの三分法は極めて有効だ。手話は単なるジェスチャーではなく、これら三つの性質が高度に、かつ未分化に溶け合っている点にその独自性がある。次節より具体的な手話語の図解分析と、記号論的な論証というレンズを通して、手話の言語学的な構造、そして現在抱えている書記言語との距離感の実態を詳らかにしていこう。

### 3.2 パースの三分法による分析、それが示すもの

#### ① アイコン (類似記号) —— イメージと図式と暗喩

第一に、手話は「類似記号 / アイコン (*Icon*)」の性質を色濃く持つ。米盛によるパースの定義を引けば、アイコンとは「その記号の性質がその対象の性質と類似している」記号である (米盛 1981:146)。また、そのアイコンは、

その対象との類似性の相違によって、さらに (1)イメージ (*images*)、(2)図式 (*diagrams*)、(3)暗喩 (*metaphors*) の三つの様式に区別<sup>9</sup>できる。

例えば、JSLの「食べる (図1)」は、左手でお碗を持ち、右手で箸を操る動作を模倣しており、実際の食事行為との「イメージ」に基づく、直接的な類似性によって意味を成立させている。しかし、これは単なるパントマイムやジェスチャーではない。こういった手話の中には、諸部分の構造的な関係性を模倣する「ダイアグラム」が隠れている。例を挙げてみよう。

JSLは日本語のように「○○を食べる」のような、同一の「食事」という行為ならば、同一の「食べる」という「動詞」を使う「一対一対応」的な考え方をしない。例えば、日本語において「ハンバーガーを食べる」と「ラーメンを食べる」という二つの文は、目的語こそ異なるが、述語である「食べる」という記号自体は同一である。しかし、JSLにおいてこれら表現する場合、ハンバーガーであれば、「両手で厚みのあるものを持ち、口を大きく開けて頬張る動作」がなされる。一方でラーメンであれば、「片手で箸を持ち、麺をすくい上げ、口をすぼめて吸い込む」という全く異なる身体技法が発現する。また、JSLの「泣く (図2)」は、一般的に両手の指を「コの字型」にし、目の下で交互に、あるいは同時に水平・垂直に動かすことで表される。これは、眼球から溢れ出す涙の軌跡を模した典型的なアイコン的記号である。さらに指の震えや落下の速度は、「悲しみ」という内面的な情動の強度と対応して、その動きを変化させる。日本語が「悲しく泣く」と副詞で補う事態を、手話

は「動作の強度」そのもので表現する。これは、空間そのものが「心の構造」を投影するダイアグラムとして機能していることを意味するのである。

手話において「食べる」や「泣く」という純粋な動詞単体を取り出すことは困難である。手話は常に「何を、いかに」という具体的文脈が身体と不可分に結びついており、それは日本語などの独立した品詞という構成を持つ体系とは、全く異なる様相を呈するからだ。つまり、手話においての動詞的作用は対象から独立した抽象概念ではなく、対象との相互作用や構造的な類似＝「ダイアグラムそのもの」を描写できるメディアなのだ。

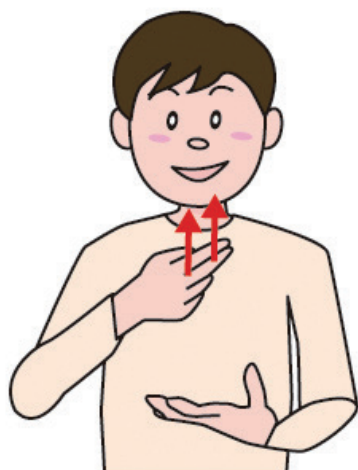


図1：食べる



図2：泣く

出典：図1、2ともに「手話のイラスト by シュワリン」(シュワリン 2025)

また、認知言語学的分析によると、人間の抽象的な思考は、身体的な経験を基盤として構築されるとされる。特に高嶋由布子・有光奈美の「メタファー」を対象にした共同研究が興味深い。高嶋らは、日本手話(JSL)の「飲み込む(2本の指を動かし、喉元からお腹をなぞっていく)」や「納得(手を「グー」の形にして、胸のあたりを「トントン」と2回ほど叩く)」などを意味する語を分析し、以下のように述べた。

〈食べたものが胃にある〉ことから〈知識を持っている〉へのメタファー的写像が、『理解することは食べること』という概念メタファーのなかで位置づけられる。

(高嶋・有光 2025:93)

このように高嶋らは、身体的基盤が記号形成に決定的な役割を果たしていることを、実証的に明らかにした。知識を食べ物に見立て、それを「腹に収める」という身体感覚が、手話の「形式(位置)」を決定している、と結論づける。

また「身体性」と「文化」の結びつきも、「お金」と「金曜日」のラベルがついた語の関係によって説明可能だ。JSLにおいて、両者は共に「親指と人差し指で円を作る」という同一の動作で表される(図3)。これは高嶋らの主張を借りれば、「貨幣=円形(コイン)」と

いう視覚的経験と、「金（カネ）＝金（キン）曜日」という漢字文化圏特有のメタファーが、身体を通じて融合した結果と考えることができる。対照的に、アメリカ手話（ASL）における「Money（図4）」は「紙幣を手のひらに打ち付ける」動作であり、「Friday」は「空中で『F』の字を描く」動作である。両者に見てわかるような共通点はなく、まったく別の表現として扱われていると推察できる。



図3：JSLの「お金・金曜日」  
出典：シュワリン，前掲

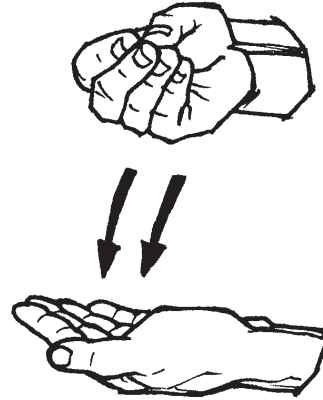


図4：ASLの“money”  
出典：Vicars, “ASL University” (Vicars 2025)

以上の事実は、手話が決して普遍的なジェスチャーではなく、各言語共同体の「身体的経験」と「文化的約束（コード）」によって体系化された言語であることを証明している。手話とは、「世界をどう身体で感じているか」という質感が、そのまま空間に飛び出してきたものなのだ。

## ② インデックス（指標記号）と身体的空間

第二に、手話は「インデックス（Index）」の塊である。パースの定義によるところのインデックスを米盛は「その対象によって実際に影響せられ、そのことによって、その対象の記号として機能するもの」としている（米盛 1981:152）。手話における「指差し」や「視線」は、空間上の対象と話者を物理的に接続する「鋏（びょう）」であり、まさしく文法的なインデックスとして機能する。

ここで「明日（図5）」や「過去（図6）」といった時間に関するJSLの表現を考えてみよう。これらの語を表現するとき、話者の身体は「現在」という原点となる。身体の前方を未来、後方を過去とする空間軸の使用は、時間が抽象概念ではなく、「私の身体」からの「物理的な距離」として把握されていることを示している。また、「昨日」という語は、「過去」というインデックス（後方へ手首を倒す）に、「指を1本立てる」というシンボル（数）が融合したハイブリッドな構成をとっている。類似の意味合いで「一昨日」「三日前」を表したいときは、ここに2本、3本と指の数を増やしていく。こうすることでJSLは過去への距離を視覚的に、かつ直感的に増幅させている。



図5：明日

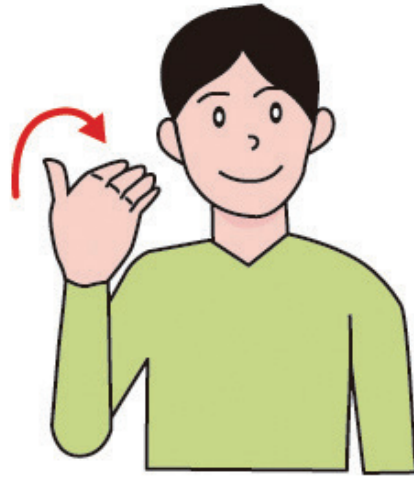


図6：過去

出典：図5、6ともにシュワリン，前掲

文字言語が「昨日」や「○日前」という数詞のラベル（シンボル）で時間を管理するのに対し、手話は身体を羅針盤のように扱って、時間を「指し示す」。この「空間の記号化」によって立ち上がる実存感こそが、手話のインデックス性の正体である。

ここでもう一つ、日本語とJSLの決定的な違いが発現している例を紹介する。日本語において、三人称を表す「彼」や「彼女」、あるいは指示代名詞「それ」は、対象との物理的距離や関係を一旦抽象化したシンボル（象徴記号）である。しかし、JSLには本質的にこうした「抽象的な代名詞」は存在しない。代わりに用いられるのが、空間を建築的に利用する「場所の割り当て」という手法である。会話の中で、話し手はまずAという人物を右前方、Bという人物を左前方の空中に仮想的に配置したとしよう。以後、その会話では「空（くう）」を指差す、あるいはその方向へ視線を向けるだけで、特定の人物を指示し続けることができる。このとき、何もないはずの「空間」は、インデックスによって特定の意味を付与された「意味の充満する場」へと変容する。文字言語が「彼」という言葉を重ねることで対象を保持するのに対し、手話は「空間」そのものに記憶や存在を留まらせるのである。この「空間の記号化」は、文字という二次元メディアでは決して再現できない、身体メディア特有の三次元的な知の術である。

### ③ シンボル（象徴記号）と慣習

第三に、手話は「シンボル（Symbol）」としての側面も併せ持つ。米盛によれば、シンボルとは「もっぱらそれを記号として解釈し使用する思想、精神に依拠する」記号性をもつ記号である（米盛 1981:155）。前述した「お金（図3）」の例が示すように、手話動作の多くは、各文化圏の「約束事」に基づいている。同じように感謝を示す表現であってもJSLの「ありがとう（図7）」が相撲の手刀に類似するのに対し、ASLの「Thank you（図8）」は投げキッスの動作に類似している。



図7：ありがとう

出典：シュワリン, 前掲



図8：Thank you

出典：Vicars. 前掲

また、川本らの指摘によれば、「男」と「女」を表わす手話も一般のジェスチャーと同じである。しかし、これらの手の形は一般のジェスチャーでは“情夫”“情婦”の意味が強く、あまり上品なしぐさとは思われていないが、手話ではれっきとした“男性”“女性”の意味となる。(中略)左の小指と右の親指をそろえると、「結婚(する)」、はなすと「離婚(する)」となる。」(川本ほか 1982:177)

この考察は、聴者社会にも存在していた「ジェスチャー」が手話として取り入れられた際に、ニュートラルな名詞機能語として「再分節」され、さらに独自の進化を遂げたことを示す興味深い事例だ。また、ここでは詳しく解説しきれないのだが、手話特有の「CL(類別詞)<sup>10</sup>」という概念も、高度なシンボルの規則に支配されている。さらに、亀井はこうも述べている。

手話は、具象的なジェスチャーどころではありません。さらに、手話の語だけを覚えて並べたところで、正しい手話の文にならないので意味は通じません。やはり、手話の文法を一から学ぶ必要があるのです。

(亀井 2009:41)

この記述からも、手話とは共同体の歴史と文化と共に育まれた、高度なシンボル体系であり、単なるジェスチャーやパントマイムの一種、といった見方は根本的に間違いであることが改めてわかるだろう。手話とは、アイコン(身体的実感)、インデックス(空間的接続)、シンボル(文化的規則)の三要素が、一つの動作の中で未分化に溶け合った「四次元の言語」なのだ。

本章の結論として強調したいのは、手話と書記言語の間に存在する「記号の構成比率のズレ」である。JSLは、その構成素自体にアイコン性や指標性を豊富に含んだ「身体メディア」であるのに対し、書記日本語は、文字という形式レベルで見れば、恣意的な規則に基づいた

「シンボリックな体系」に偏ったメディアである。翻訳・通訳において生じる決定的な情報の欠落、その正体はこの比率のズレにある。身体の三次元的なダイアグラムを、抽象的なシンボルである「文字」へと強引に押し込めようとする際、手話が抱えていた生々しい身体的感性は、翻訳の網の目からこぼれ落ちてしまうのである。我々聴者は、この「こぼれ落ちたもの」の存在に気づかないまま、安易に「手話を日本語に翻訳できた」と錯覚していないだろうか？ その錯覚こそが、ろう者の言葉を歪め、彼らの存在そのものを透明化する暴力の始まりなのである。次章では、このズレを無視し、豊かな身体性を持つ手話を、文字という「二次元の檻」に押し込める「翻訳」といふ「ラベル化」の暴力性について、具体的に検討していく。

## 第4章 翻訳の暴力性と「ラベル」の陥穽

### 4.1 「ラベル」という偽りの等価

手話という四次元的な身体言語を、二次元の紙面やデータとして管理しようとする際、必然的に立ちはだかるのが「記述」の問題である。現在、手話研究や教育の現場で一般的に採用されているのが、一つの手話単語に対して特定の日本語単語を便宜的に割り当てる「ラベル（辞名／*Gloss*）」という手法である。しかし、この手法が孕む根本的な欠陥について、手話言語学を研究する川口聖は以下のように厳しく指摘している。

手話表現自体の意味と、その手話表現に付記するマジョリティ言語の辞名の意味は完全一致しない。

（川口 2023：32）

川口の指摘通り、手話は手の形、位置、動きに加え、表情や空間配置といった多層的な要素が同時並行的に意味を構成する記号体系であり、線状的な文字体系である日本語の語彙とは、構造的に一对一で対応し得ない。それにもかかわらず、聴者が「食べる」や「わかる」といったラベルを安易に付与するとき、そこには「日本語の手話化」とも呼ぶべき「同化」の暴力が作用している。これをマンディはベルマンの主張を用いて、原文の異質さを削ぎ落とし、受け手（聴者）にとって理解しやすい自国語の枠組みへと引き寄せるプロセスは、元言語の主体性を破壊する行為に他ならない、と述べる。ラベルは、手話を持つ豊かな身体的リアリティや情動の強度を、日本語という既知の概念へと封じ込める「文字の檻」として機能してしまうのである。

ここで、筆者自身の記述についても、自戒を込めて言及しなければならない。本稿においても、分析の便宜上「 」を用いた日本語ラベルを多用している。第3章で試みた「手話の複雑な身体動作を文字で記述する」という作業は、筆者の能力を遥かに超える困難なものであった。その躍動感や空間的な広がりや正確に伝えることの限界を痛感し、結果として自ら批判するはずのラベルという手段に縋らざるを得なかった。

この矛盾を認めた上で、本稿におけるラベルは、あくまで手話という巨大な山脈を登るた

めの「未熟な補助線」に過ぎないことを断っておきたい。ここからは、まさしくこの補助線が、いかにして手話の実像を歪めているか、その具体的なメカニズムを検証していく。

ラベル化がもたらす最大の弊害は、手話が本来持っている多義性（ポリセミー）と身体的強度の隠蔽である。JSL研究者の松田俊介は、日本語のラベルが「ただ一つの意味しか持たないような印象を受ける」ことで、その語が持つ本来の多義性が不可視化される問題を批判している。特に、松田が挙げる「ドアを開ける」を意味する手話を例に挙げた研究者の姿勢への批判は、この問題を鮮やかに浮き彫りにする。

彼らのラベルでは「どうやってそれを行ったのか」という意味の側面が削除されているわけである。（中略）実はこの「どうやって」の部分は日本手話の運用における重要な位置を占める。

（松田 2022:196）

つまり、手話における一動作は、抽象化された「概念」を指す以前に、その行為の具体的な「様態（どうやって）」そのものを描写している。しかし、これを「ドアを開ける」という抽象的な日本語ラベルで固定した瞬間、そこに存在したはずの「押し開ける重み」や「スライドさせる速度」といった身体的情報は一気に蒸発してしまう。この「ラベル貼り」の問題は、具体的な身体経験という「下位概念」を日本語という抽象的な「上位概念」へと強制的に回収する「提喩的暴力<sup>11</sup>」が手話研究をはじめ、様々な場で起こりうることを示唆する。聴者は自分が貼ったラベル（日本語）のレンズを通してしか手話を見なくなり、結果として手話そのものが持つ身体的な強度を無視することになるのだ。

この隠蔽は、手話言語の感情表現において、ことさら深刻な事態を招く。例えば、第3章で触れた「泣く」という手話において、指の震えや表情の歪みには、日本語の「悲しい」という形容詞では到底収まりきれない情動の昂りが凝縮されている。フェリックス・ガタリが説く「非-シニフィアンの強度<sup>12</sup>」、すなわち意味に分節される前の物質的なエネルギーの流れこそが、手話の真価であるはずだ。しかし、ラベル化という翻訳手続きは、この震えや歪みを、単に「泣く」という記号を補足する副詞的な要素へと貶めてしまう。聴者社会が提供する「ラベル」という檻は、ろう者の身体が発する「意味以前の叫び」を、聴者にとって理解可能な、静かで無害な「記号」へと飼い慣らしてしまっているのである。

#### 4.2 「異質化」という翻訳倫理 —— 同化への抵抗

この節では少し趣向を変えて、ラベル貼りの問題を翻訳哲学の観点からも考えてみよう。ヴァルター・ベンヤミンは『翻訳者の使命』（1923）にて、異なる言語間における語の差異を「意味（意図）の仕方」と「意味（意図）されるもの」という概念<sup>13</sup>で説明した。アントワヌ・ベルマンはベンヤミンの思想をこう紹介している。

ドイツ語の「ブロート」とフランス語の「パン」とでは、たしかに意味されるものは同じだが、意味の仕方は同じではない（中略）この二つの意図の仕方は互いに相容れず、ドイツ人とフランス人にとってまったく交換不可能なものである。けれどもドイ

ツ人もフランス人も意図するものは同一のシニフィエであり、同一の指示対象（レフェラン）である。

（ベルマン 2013:157-158）

この知見を JSL と日本語の関係に延伸すれば、手話の動作が指し示す対象が日本語の単語と同じであっても、その「意味の仕方」は日本語のそれとは根本的に異なっていることがわかる。日本語の「パン」という記号は、音素の組み合わせによる恣意的なシンボル（象徴記号）として立ち上がる。対して、手話において「食べる」などの動作を伴ってパンを表現する際、そこにはパンの形状を模すアイコン性や、口元への距離を示すインデックス性が「意味の仕方」として分かちがたく刻まれている。ラベルを貼る行為は、この決定的な差異を無視し、「意味される対象（パン）」さえ共通していれば円滑に翻訳は成立しているという、傲慢な錯覚を助長する。

さらに深刻なのは、聴者によるラベル貼りが、本来存在しないはずの「日本語と手話のズレ」を問題視する「疑似問題」を捏造してしまう点である。松田は、日本語の「まし」や「まあまあ」というラベルを貼られた手話表現を例に挙げ、この問題を鋭く突いている。松田によると、聴者の研究者や学習者は、手話単語に一旦「まし」というラベルを貼ると、その手話が日本語の「まし」という単語と全く同じ意味範囲やニュアンス（例えば、不満は残るが比較の上ではマシ、といった用法）を持っていると思い込んでしまうという。そして、実際のろう者の運用において日本語の「まし」とは異なる使われ方をした際、それを「手話の語彙の貧弱さ」や「日本語からのズレ」として、あたかも手話側に欠陥があるかのように論じてしまうのだ（松田 2022:198）。

もちろん、これでは主客転倒の極みである。不一致を起こしているのは手話そのものではなく、聴者が勝手に貼り付けた「日本語のラベル」の方なのだから。聴者は自分が用意した「日本語の網」というレンズを通してしか手話を見ようとせず、そのレンズに映らないものを欠落と見なす。これは、ガタリが説く、既存の記号システムによる「領土化（*Territorialization*）」のプロセス（伊藤 2024:97-198）と類似する。社会学者の伊藤守によれば、この思想は身体を通じて感受される流動的な「記号-粒子」が、既存の記号システムに取り込まれ、「これは〇〇である」として同定・固定化される過程を指すという。つまり翻訳における領土化とは、被翻訳言語（すなわち手話）の持つ分子的な豊かさを剥奪し、マジョリティの記号秩序へと強制的に回収する営みに他ならない。このように「翻訳された世界」の論理を一方向的に押し当てる姿勢は、他者の言語を自らの秩序へと一方向的に領土化する暴力性を孕んでいる。こうした圧力は、翻訳を単なる「わかりやすさ」の追求へと矮小化し、手話が本来持っていた強靱な身体性を、聴者にとって理解しやすい平易な情報へと作り変えてしまうのだ。

翻訳学の歴史において、ここまで検討してきたようなマジョリティ言語への強引な引き寄せは、「同化作用（*Domestication/Naturalization*）」と呼ばれ、批判の対象となってきた。シュライアーマハーは、次のように翻訳には二つの道しかないとした。「翻訳者は、作者をできるだけそっとしておいて読者を作者に近づけるか、あるいは、読者をできるだけそっとしておいて作者を読者に近づけるか、のいずれかである。」（マンディ 2009:46）。

しかし、現在の聴者社会が JSL に対して行っているのは、その逆の「同化」の徹底であ

る。マンディは、ベルマンが「同化」という翻訳方略を、異質性を否定する一般的な傾向として慨嘆したと述べる。またマンディはベルマンについてこうも指摘する。

「翻訳行為の適切な倫理的目的」は、ベルマンによれば、「異質なものを異質なものとして受け入れること」である。

(マンディ 2009:237)

さらにベルマンは、自身の論文タイトルにもある「試練 (épreuve)」という言葉で、「未知の外国テキストと言葉を経験するという目標文化にとっての試練」という意味で用いている (マンディ 2009:236)。つまり、翻訳とは本来、自分たちの枠組みの中に他者を綺麗に収めることではなく、未知の異質な言葉に触れることで、受け手である我々の文化そのものが「試練」にさらされる経験であるべきなのだ。しかし、現状の日本語対应手話やラベル化は、この「試練」を回避し、手話を聴者にとって平易でわかりやすいものへと変質させてしまっている。

では、真に誠実な翻訳とはどうあるべきか。ここで参照すべきは、ベルマンに影響を受け、「異質化 (*foreignizing*)」を擁護したローレンス・ヴェヌティの視座である。ヴェヌティは、異質化翻訳について「外国テキストの解釈においては、[受容化翻訳と] 同じく偏るが、それを隠蔽せず、誇示する傾向がある」と述べている (マンディ 2009:235)。これを手話翻訳に適用するならば、手話の「身体性」や「空間性」という、書記言語にとっては異質で不透明な要素を、無理に日本語の文法に馴染ませて隠蔽するのではなく、むしろその「翻訳できなさ」や「ズレ」を誇示することこそが、倫理的な態度と言えるのではないだろうか。

手話を文字で記述することへの絶望的な葛藤。その「文字にできない」「翻訳しきれない」という痛みこそが、手話の持つ他者性の証明に他ならない。安易な等価性を捏造して「わかったつもり」になるのではなく、翻訳不可能な隔たりを直視し、その不透明さをそのままに残しておくこと。それこそが、ベルマンの説く「異質なものの経験」であり、ヴェヌティが目指した、差異を隠蔽しない翻訳の在り方であるはずだ。現実のコミュニケーションの場において、この異化の試みは、マジョリティ側の「わかりやすさ」という特権的な権利の前に、踏みじられてしまうことも多い。しかし、その「わかりやすさ」を維持するために、ろう者の身体はどれほどの「同化の負荷」を強いられているのだろうか。次章では、この翻訳の暴力性が、実際の教育や生活という現場において、どのような「断絶」と「葛藤」を生んでいるのかを検討していく。

## 第5章 バイリンガリズムの葛藤——「翻訳された思考」の行方

### 5.1 書記日本語のアンビバレンス——「壁」としての筆談、「翼」としての客観化

聴者とろう者のコミュニケーションにおいて、筆談はしばしば「万能な共通言語」であるかのように誤認される。「声」が通じないのならば「文字」で書けばいい。聴者社会は、こ

の代替案を最も簡便でフェアな解決策であると信じて疑わない。しかし、本論文が提唱するように、文字を中立的なツールではなく、特定の身体性を要求するメディアとして捉えるならば、その背後にある非対称性は無視できない。

ろう教育を専門とする上農正剛は、日本のろう教育が日本語の教科書（書記言語）を基盤としている現実を指摘しつつ、日本語と日本手話（JSL）の「二者の文法構造は全く異なっている。そこには明確な文法レベルの「断絶」がある」と指摘する（上農 2020:82）。聴者にとって、書記日本語は第一言語（音声日本語）をそのまま視覚化した「地続き」のメディアである。

それに対して、JSLを第一言語とするろう者にとって、日本語の読み書きは、単に新しい記号を覚えることではない。それは、三次元の空間で同時多発的に生成される「身体知」を、線状的に流れる一次元的なシンボル体系へと「翻訳」し続ける、終わりのない重労働を意味している。筆談という場において、聴者はただ自らの内言を文字へと出力するだけで済む。対してろう者は、脳内に渦巻く三次元的な空間イメージや情動の強度（ガタリの言う「非シニフィアン」）を、日本語の語彙という「文字の檻」に適合するように、瞬時に解体し、再構成しなければならない。この時、ろう者の身体は、マジョリティの記号秩序に合わせるための莫大な「認知的コスト」を一方向的に支払わされている。この断絶を考慮すれば、筆談を対等な共通基盤であると言い切ることなど不可能である。それは、聴者が自らの土俵を一步も動くことなく、ろう者が「翻訳」という重荷を背負って歩み寄ることで辛うじて成立する、極めて非対称なコミュニケーションの姿だということだ。

さて、ここまでは筆談に伴う暴力を指摘したが、一方で、ろう者が現代社会で知性を駆動させる上で、書記言語を完全に放棄することが現実的でないのもまた事実である。上農は、書記日本語が持つ「思考言語」としての重要性についても冷静な示唆を与えている。

書記日本語の習得が必要なのは、それが最も効力を発揮する思考言語だからである。（中略）音声言語や手話言語では思考を対象化（思考内容を外部に取り出し、それを自分で確認できる状態にすること）し、自他の観点から繰り返し比較検証することは出来ない。

（上農 2020:78）

音声や手話は、録画などの技術を介さない限り、その場限りの一過性のメディアである。対して文字は、思考を外部メモリとして保存し、時空を超えた蓄積を可能にする。本稿において、筆者が手話という「動く記号」を分析する際にも、文字メディアに依拠せざるを得なかったのは、この「保存性」と「体系性」が知の構築に不可欠だからである。上農は、この書記言語（L2）を、ろう児が世界を広げるための「第二の翼」と位置づけているわけである。むろん、この翼を求めることが、既存の聴者中心主義への適応（同化）を含んでいることは否めない。しかし、重要なのは、JSLさえ習得すれば日本語も自然と身につくとする安易な「バイリンガル楽観論」への批判的視座だ。上農が突きつける「断絶」の現実は重い。文字という「檻」の不自由さを自覚しつつも、なおその檻を自らの「武器」として使いこなすための、戦略的でタフなバイリンガリズムの構築は、聴者とろう者、その両側の努力がな

ければ成し得ないだろう。それでは、この「断絶」を繋ぎ止める術はあるのか。阿部(2021)は、バイリンガル教育を受ける児童の調査を通じ、一つの希望を提示している。

本研究で対象となった児童は、L1である日本手話によって培われたメタ言語力や背景知識の豊富さなどが転移させることで、L2である日本語の読解を状況モデルによる読みによって支えているのではないかと推察できる。

(阿部 2021:40)

この「状況モデル」とは、テキストの表面的な文法構造(シンボル)を追うだけでなく、そこに描かれた事態や情景を、脳内で統合的なイメージとして立ち上げる「意味の建築物」のことである。第3章で考察した通り、手話はその空間的・写像的な特性により、出来事をダイナミックかつ立体的に把握する能力を育む。この「空間の中で意味を構成する力」こそが、無機質な文字の羅列を解説し、その向こう側にあるリアリティを再構築するための鍵となる。

さらに、「第二言語習得=バイリンガリズム」の研究を専門とする河野円は、カミンズの「相互依存説」に基づき、日本の英語教育について「相互依存説により、母語の力を利用することの正当性が裏付けられる」と述べた。カミンズによれば、異なる言語の深層には「共有基底言語能力(CUP: Common Underlying Proficiency)<sup>14</sup>」が存在する。この概念を拡張すれば、表面上の文法(シンボル)が地続きでなくとも、概念を操作し論理を組み立てる「根底の知性」は共有されている、とすることが可能ではないだろうか。カミンズおよび河野の議論は、身体メディアである手話を通じて深く思考し、豊かな世界認識を育てることこそが、逆説的に、日本語という「文字メディア」を攻略する最短の道となり得るということを示す、興味深い一例である。

## 5.2 同化の負荷から「生成変化」へ——バイリンガリズムの新たな地平

ここまではプラスとマイナスの両面から、ろう者の書記日本語学習の是非について論じてきた。しかし、前節で述べた「転移」や「共生」という希望を、また違った形で教育現場の慣習が阻害している現状がある。それが、中途半端な翻訳の産物である「日本語対应手話(手指日本語)」の強制である。日本語の語順に合わせて手話単語を並べるこの手法は、聴者にとっては理解しやすいが、ろう者の認知プロセスには過酷な負荷を強いる。オリバー・サックスは次のように述べ、視覚モードに適応しきれないろう者の多大な負担を指摘した。

手指英語に接したとき感じる短期記憶と認知能力の負担の大きさは、成人ろう者の場合、違和感や緊張感として経験される。

(サックス 1996:157)

視覚は「同時並行処理」に長けた器官である。JSLは三次元空間を活用して情報を圧縮し、一瞬で意味を提示するが、対应手話は日本語の線状的文法に従うため、情報が不必要に冗長となる。これにより、脳が一度に保持できる情報のキャパシティを容易に超えてしまう

のだ。さらに手話辞書学を研究する末森明夫は、次のように言う。

漢字の上にルビが配置される形式は、手口共起<sup>15</sup>のとき、『胸の前で表出される手話構文』と『mouthing<sup>16</sup>』の位置関係と似ている。一方、漢字の横にルビが配置される形式は（中略）『手が顔の横で動くような手話構文』と共起する『mouthing』の位置関係に似ている。

（末森 2023：45）

そこでは手話動作が、常に日本語という「主人」の補助をする従属的な存在へと貶められる。この構造が手話固有のリズムをも破壊することを、神田は以下のように説明する。

手話においても、厳密な一般言語学的構成素である音韻単位を設定するよりも、むしろモーラ<sup>17</sup>に相当する音韻単位を設定の方が実用的ではないか、というのが私論である。実際、俗にいう「日本語対应手話」は日本語のモーラに対応していることが多く、いわゆる聴者手話のリズムがモーラ対応のため、“手話のモーラ”とずれがあり、聾手話使用者に強い違和感がある。

（神田 2022：2）

この「手話のモーラ」とは、身体が生み出す独自の拍節だと理解できる。日本語の語順という外部の檻に無理やり動作を当てはめることは、この固有のリズムを断ち切り、ろう者の身体を「ぎくしゃくとした機械」のように扱う暴力に他ならない。以上のように、ろう者が日本語を読み書きするという営みは、単なる事務的な言語変換ではない。それは、JSLという四次元的な身体メディアが生み出した「原意<sup>18</sup>」を、日本語という別次元の形式へと押し込める、痛みを伴うプロセスである。しかし、本稿で論じるバイリンガリズムとは、二つの言語を滑らかに操る「翻訳の完成形」を目指すものではない。むしろ、日本語という「文字の檻」の冷たさに震えながらも、そこから一歩も引かずに自らの身体的リズムを刻もうとする、「翻訳不可能な領域を抱えたままの生」の戦術を指し示したい。

ジル・ドゥルーズとガタリが提唱した「マイナー文学<sup>19</sup>」や「生成変化<sup>20</sup>」という概念は、まさにこの文脈で響く。伊藤が指摘しているように彼らの説く「抵抗」とは、多数派の言語を完璧に模倣することではない。むしろ多数派の言語の定数的な構造に「ズレ」を導入することによって、支配的な記号秩序を攪乱することである（伊藤 2024：271）。とすれば、ろう者が日本語社会を生きるとは、この耐え難い翻訳の負荷を引き受けつつ、マジョリティの言葉の隙間に、彼ら独自の「声」を響かせ続けるという、孤独で強靱な営みに他ならない。我々聴者に求められているのは、その「ズレ」を修正すべき間違いとして断じることではなく、それを受容し、その中に新しい言語の可能性を見出すことだと言えはしないだろうか。

## 第6章 結論——隔たりへ歩み寄る「中間休止」の思想

### 6.1 翻訳の暴力性を超えて——「同化」から「異化」への転換

本論文では、日本手話（JSL）を主たる分析対象とし、手話が単なる視覚的ジェスチャーではなく、空間と時間を高度に組織化した「四次元の言語」であることを論じてきた。記号論的な視座から解剖すれば、手話は身体的なアイコン性やインデックス性をその構成素の中に豊かに含んでおり、線状的な文字メディアとは決定的な断絶——すなわち「記号の構成比率のズレ」——を有している。しかし、1880年のミラノ会議以来、聴者中心主義に貫かれた社会システムは、この断絶を埋めるべき「欠陥」と見なし、書記言語への「同化」を執拗に強いてきた。そしてシュライアーマハーが提示した翻訳の二つの道のうち、近代社会が採り続けてきたのは「作者（ろう者）を読者（聴者）に近づける」道であった（マンディ 2009:46）。それはラベル貼りや対応手話を通じて、手話の異質性を剥ぎ取り、聴者にとって「わかりやすい」情報へと書き換える収奪のプロセスであった。本研究が明らかにしたのは、その「わかりやすさ」というバリアフリーの仮面こそが、手話の身体的強度を殺し、ろう者の認知資源を枯渇させる暴力の正体であるという、残酷な事実である。

我々聴者が、書記言語という「文字の檻」から自らを解放し、ろう者の真の主体性と出会うためには、この道を逆転させねばならない。すなわち、ヴェヌティらが提唱する「異化」の徹底である（マンディ 2009:235）。翻訳において、手話の持つ翻訳困難な身体性を無理に日本語化せず、あえてそのまま残すこと。聴者（読者）を、慣れ親しんだ日本語の安楽な椅子から立ち上がらせ、ろう者（作者）が生きる未知なる身体性の宇宙へと放り出すこと。翻訳できない隔たりを、安易な等価性（ラベル）で埋めるのをやめ、その不透明さをそのままに尊重すること。その「沈黙」や「途切れ」を受け入れる倫理からしか、真の共生は始まらない。聴者にとっての「わかりにくさ」を、排除の対象ではなく、他者の他者性を尊重するための「必要な歩み」として再定義すること。それこそが、同化の暴力に対する「抗い」の第一歩となる。

この「異化」の思想を教育の場に導入するならば、それはろう児を「聴者に似せる（同化させる）」ことを至上命題としてきた従来の教育観の、根本的な放棄を意味する。特別支援教育を研究する阿部敬信は、ろう学校に通う児童を対象とした研究で得られた知見を以下のように述べる。

本研究で対象となった児童は、L1である日本手話によって培われたメタ言語力や背景知識の豊富さなどが転移させることで、L2である日本語の読解を状況モデルによる読みによって支えているのではないかと推察できる。

（阿部 2021:40）

つまり、JSLで培われたメタ言語能力や背景知識は、日本語読解を支える「状況モデル」を構築する力となると述べているのだ。この研究結果は、第一言語としての手話が決して言語として劣位に置かれぬことを証明する。手話という四次元的なメディアで豊かな世界認

識を構築しているからこそ、ろう児は文字という無機質な符号の向こう側に、生き生きとした現実を「視る」ことができるのである。したがって、新たな教育の展望は、書記言語の文法や語彙（シンボリック秩序）を一方向的に注入することにはない。むしろ、手話が持つ豊かなアイコン性やインデックス性を「思考の唯一無二の基盤」として承認した上で、書記日本語を一つの「異質なメディア」として客観的に提示するバイリンガル教育へと舵を切るべきである。そこでは、日本語は「同化すべき規範」ではなく、自らのアイデンティティを保持したまま、聴者社会という「異郷」と交通するための「戦略的な外部装置」へと変容する。

上農が指摘した書記日本語の重要性も、ここでは新たな意味を帯びる。文字は、手話という身体的メディアを「思考に向かない」と断ずるための物差しではない。むしろ、自らの内なる三次元的な躍動を、社会の中で一旦「対象化」し、他者へ言葉を精緻に紡ぎ出すための武器として再定義される。ろう児が日本語という「文字の檻」の中に自分たちのリズム（声）を響かせること。それこそが、本論文が掲げる「異化としての教育」の到達点である。彼らはもはや「日本語が不自由な者」ではない。二つの異なる記号秩序の間で、常に新しい意味を生成し続ける、強靱な「翻訳の主体」なのである。

## 6.2 「中間休止」の思想と共創の未来 —— 文芸メディアとしての提言

最後に、我々が目指すべき関係性について、フリードリヒ・ヘルダーリンの「中間休止 (*Caesura*)」という概念から考察したい。三ツ木によれば、

リズムを形成する詩行の中央部分に「中間休止」がおかれるが、(中略) ヘルダーリンはこれを単なる欠如、無音とは捉えず、むしろ「純粋な話」、意味や音声という不純物を取り除かれた語の究極の姿と考えた。

(三ツ木 2008:248)

手話と日本語の「翻訳」の狭間に生じる、不透明な空白。あるいは神田が指摘した、意味と意味を繋ぐ無標な「遷移」動作は、まさにこの「中間休止」に相当する(神田 2022:2)。それは日本語のラベルには決して変換し得ない、身体の動きの余韻であり、意味に回収しきれない「純粋な運動」そのものである。聴者が手話を単なる記号の羅列(ラベル)として消費するのをやめ、手話の軌跡が描き出す四次元的な広がり身に委ねるとき、そこにはこれまで存在しなかった新しい対話の空間が生まれる。それは、聴者が自らの「特権的な言語(音声・文字)」という安全圏を脱し、手話という「メディア」の傍らへ歩み寄るプロセスである。

1880年のミラノ会議から連綿と続く言語的暴力、その鎖を断ち切る唯一の方法は、翻訳によって「隔たり」を消し去ることではない。むしろ、その「翻訳不可能な隔たり」こそを、他者性として分かち合うことにある。確かに「文字の檻」は、依然として我々の思考を縛り続けているかもしれない。しかし、その檻の隙間から漏れ出す「中間休止」の静寂の中に、我々は手話という身体が奏でる「四次元の響き」を聴き取ることができるはずだ。その響きへの共振こそが、強引な翻訳によって一つにまとめられた偽りの世界ではない、互いの「翻訳困難性」を抱えたまま響き合う、共創の未来を開く鍵となる。

文芸メディア専攻において「文字」を根源的なメディアとして捉えることは、同時に「文字にできないもの、言葉では示せないもの」の圧倒的な重みを知ることに他ならない。本研究は、手話という「文字なき言語」の分析を通じて、文字による翻訳がいかん人間存在を分節し、規定し、時にその生命的な躍動を一方的に変容させてきたかを浮き彫りにした。しかし、本稿を通じて同時に明らかになったのは、ろう者の身体が、どれほど苛烈な同化の圧力にさらされても、自らの「原意」を守り抜き、無機質な文字の連なりの中に独自の呼吸とリズムを滑り込ませる、強靱な「表現主体」であるという事実である。ドゥルーズとガタリの言葉を借りるとすれば、彼らは文字という檻の綻びから自らの身体知を滲ませる「生成変化」の体現者なのである。

かつて、ろう者と聴者が共生していたマーサズ・ヴィンヤード島の理想は、もはや失われた過去の神話ではない。それは、互いの言語の不完全さを認め合い、翻訳の困難な道筋を祝うことによって、現代の錯綜したメディア環境の中に再構築しうる、倫理的な未来のビジョンである。私たちは「ことば人間 (ホモ・ロクエンス)」として、音声と身体、文字と沈黙の「間」に立ち続けなければならない。そこにある「断絶」こそが、私たちが他者という名の異質な存在と真に出会うための、唯一の通路なのだから。

## 注

- 1 ストーキー『統語の次元構造四次元の言語』1979年の記述。(サックス 1996:134内)より引用。
- 2 ラベル (*Label/Gloss*):手話言語学において、手話単語に対応する音声言語(日本語など)の単語を便宜的に付与したもの。「辞名」とも呼ばれる。研究や記録のために用いられるが、手話本来の意味や文法構造とは必ずしも一致しない。松田(2022)を参照。この問題点については第4章で詳述する。
- 3 日本語対应手話 (*Signed Japanese*):日本語の語順や文法構造に合わせて、手話単語を配列する方法。手指日本語とも呼ばれる。日本語の習得を目的として教育現場などで用いられるが、手話本来の空間的文法やリズムとは異なるため、ろう者にとって不自然であり、認知的負荷が高いことが指摘されている。サックス(1996:157)を参照。
- 4 ヤーコブソンの翻訳分類:  
「ヤーコブソンによる翻訳の3種とは次の通りである。  
(1) 言語内翻訳 (*intralingual translation*), または「言い換え (*rewording*)」:同一言語内の他の記号により言語記号を解釈すること。  
(2) 言語間翻訳 (*interlingual translation*), または「翻訳そのもの (*translation proper*)」:他言語により、言語記号を解釈すること。  
(3) 記号法間翻訳 (*intersemiotic translation*), または「移し換え (*transmutation*)」:非言語記号体系により言語記号を解釈すること。」  
(*Jakobson 1959*, マンディ 2009:6)より引用。
- 5 同化 (*Naturalization*):翻訳において、原文が持つ異質性や他者性を排除し、受け手(聴者)の言語規範や文化的枠組みに合わせて表現を作り変えること。シュライアー・マハーやベルマンらによって批判的に検討された概念であり、本稿では手話を日本語の枠組みに押し込める行為の暴力性を指す。(Berman 1985b, マンディ 2009:237)を参照。

- 6 構成素 (*Constituents*): 手話を構成する最小単位のこと。一般的に「手の形」「位置」「動き」の三要素 (および非手指動作) を指す。神田 (2022:1) を参照。川本ら (1982:181) はこれらを「構動素」と呼び、規則性の高い組織であると指摘している。
- 7 二重分節 (*Double Articulation*): 言語が「意味を持つ最小単位 (形態素)」と「意味を持たない音の単位 (音素)」の二層構造で成り立っているという性質。神田 (2022:6-7) は、手話の構成素は語彙の構造が曖昧であることが多く、音声言語のような明確な二重分節の適用は困難であると指摘している。
- 8 口話法 (*Oralism*): ろう者の教育において、手話の使用を禁じ、相手の口の動き (読唇) と発声訓練によってコミュニケーションを行わせようとする指導法。サックス (1996:52) によれば、この手法の強制は、ろう児の言語的・知的発達に深刻な遅れをもたらす結果となった。
- 9 アイコンの区別: パースの述べる「イメージ・ダイアグラム・メタファー」については、米盛 (1981:147-148) の解釈に基づき、分類する。
- 10 CL (*Classifiers*/ 類別詞): 手話において、対象物の形状、大きさ、動きなどを描写するために用いられる特定の指の形や動きのこと。亀井 (2009:46-47) を参照。
- 11 提喩 (*Synecdoche*): 全体で部分を、あるいは部分で全体を表す修辞技法。「花見 (桜を見る)」などがこれに当たる。
- 12 非-シニフィアンの (*A-signifying*): フェリックス・ガタリ用語。言語的な意味 (シニフィアン) に回収される以前の、物質的・身体的なエネルギーや情報の流れなどの様々な形象を指す。伊藤 (2024:31) を参照。
- 13 意味されるもの / 意味の仕方: ベンヤミンが提示した概念。ベルマンは「意図の仕方と意図されるものとの区別は、ベンヤミンがそれを定式化したまさにその次元——言語的次元において不確かなものとなる」と述べた。(Benjamin 1923, ベルマン 2013:159)
- 14 共有基底言語能力 (CUP): ジム・カミンズが提唱した「氷山説」に基づく概念。二つの言語 (L1 と L2) は、表面上の形態は異なっても、水面下 (認知・思考レベル) では共通の能力基盤によって支えられているとする仮説。カミンズの議論 (Cummins 1979, 河野 2025:326) を参照。
- 15 手口共起: 「手話構文と *mouthing* が共起する事象」のこと。末森 (2023:37) を参照。
- 16 *Mouthing*: 手話口形などと訳される、口話型の動作表現。末森 (2023:37) を参照。
- 17 モーラ (*Mora* / 拍): 一般的には音声言語における音の長さのリズム単位 (拍) を指す。
- 18 原意 (*mening*): 伊藤 (2024) は、ガタリ思想を語る際に、言語学者ルイ・イエームスレウの言葉を借りて、こう説明した。  
「想定される形式を伴わない実質とは何か。(中略) イエームスレウはそれをデンマーク語で「原意 (*mening*)」と呼ぶ。(中略) 範列化した思想でも、また既存の言語体系にもとづく形式化された表現実質でも表現できないイメージやモチーフが生み出される事態、それが「内容原意」であり「表現原意」であるだろう」(伊藤 2024:250, 261)  
本稿においては、これを翻訳 (ラベル化) される以前の、JSL という身体メディアが空間内に生成した「意味の総体」を指す造語として用いる。これは単なる辞書的な定義 (意味されるもの) だけでなく、第3章で論じた身体的強度や空間的なダイアグラム (意味の仕方) を含んだ、未分節の情報の塊である。
- 19 マイナー文学 (*Minor Literature*): ジル・ドゥルーズとフェリックス・ガタリが提唱した概念。少数者 (マイノリティ) が多数派 (メジャー) の言語の中に場所を占め、そのメジャーな言語を使って書く文学を指す。彼らは、マイナー言語の使用が「多数派の脱領土化をもたらすことによっ

てのみ価値をもつ生成変化の胚種」(Deleuze & Guattari 1980, 伊藤 2024:271 より引用) となると論じている。

20 生成変化 (*Becoming/Devenir*): ドゥルーズ=ガタリの哲学における中心概念。伊藤 (2024:271) によれば、これは「多数派にたどりつくこと (同化)」ではなく、「過剰や誤謬によって多数派の代表的なモデルを逸脱し続ける振幅としての連続変化」を指す。本稿においては、ろう者が日本語の規範からズレていく過程を、誤りではなく、言語を内側から変質させる創造的なプロセスとして捉えるためにこの概念を用いている。

## 【参考文献】

- 阿部敬信, 2021, 「日本手話・日本語バイリンガル児童はどのようにして日本語を読んでいるのか」『人間科学』3:33-43.
- Berman, Antoine 2008, “*L’Âge de la traduction: «La tâche du traducteur» de Walter Benjamin, un commentaire*”, *Universitaires de Vincennes*. (岸正樹訳, 2013, 『翻訳の時代 ベンヤミン「翻訳者の使命」註解』法政大学出版局.)
- 伊藤守, 2024, 『フェリックス・ガタリの思想——生の内在性の哲学』青土社.
- 亀井伸孝, 2009, 『手話の世界を訪ねよう』岩波書店.
- 神田和幸, 2022, 「手話の構成素——音声言語との比較——」『手話コミュニケーション研究会論文集』5:1-9.
- 川口聖, 2023, 「記述文法としての日本手話言語」『手話学研究』32 (2):31-36.
- 川本茂雄・田島節夫・坂本百大・川野洋・磯谷孝, 1982, 『日常と行動の記号論』勁草書房.
- 河野円, 2025, 「カミンズのバイリンガリズム理論再考」『津田塾大学紀要』57:325-36.
- 松田俊介, 2022, 「日本手話研究はラベルを使用するべきではない」『東京大学言語学論集』44:193-209.
- 三ッ木道夫, 2008, 『思想としての翻訳』白水社.
- Mundy, Jeremy 2001, “*Introducing Translation Studies*”, *Routledge*. (鳥飼玖美子監訳, 2009, 『翻訳学入門』みすず書房.)
- NHK 放送技術研究所, 2025, 「手話モーションデータベース」, 手話 CG 研究紹介サイト, (2025 年 12 月 21 日取得, <https://www.nhk.or.jp/str/signlanguagecg/searchJSL/>).
- Sacks, Oliver 1989, “*SEEING VOICES——A Journey Into the World of the Deaf*”, (佐野正信訳, 1996, 『手話の世界へ』晶文社.)
- シュワリン, 2025, 「手話のイラスト by シュワリン」, (2025 年 12 月 21 日取得, <https://shuwa-rinrin.com/>).
- 末森明夫, 2023, 「手話構文と *mouthing* の共起にみる形式と意味の動態性」『手話学研究』32 (2):37-50.
- 高嶋由布子・有光奈美, 2025, 「日本手話の空間に表される否定の概念メタファー——身体性に根ざした『理解』の記号ネットワーク——」『言語研究』167:79-104.
- 上農正剛, 2020, 「聾教育における手話と書記日本語の問題」『手話学研究』29 (2):74-93.
- Vicars, William G., 2025, “*ASL University*,” (Retrieved December 21, 2025, <https://lifeprint.com/index.htm>).
- 『私たちの手話』再編制作委員会編, 2015, 『わたしたちの手話学習辞典 I』全日本ろうあ連盟.
- 米盛裕二, 1981, 『パースの記号学』勁草書房.